

(3) 『環境』：環境首都・札幌の実践空間の形成

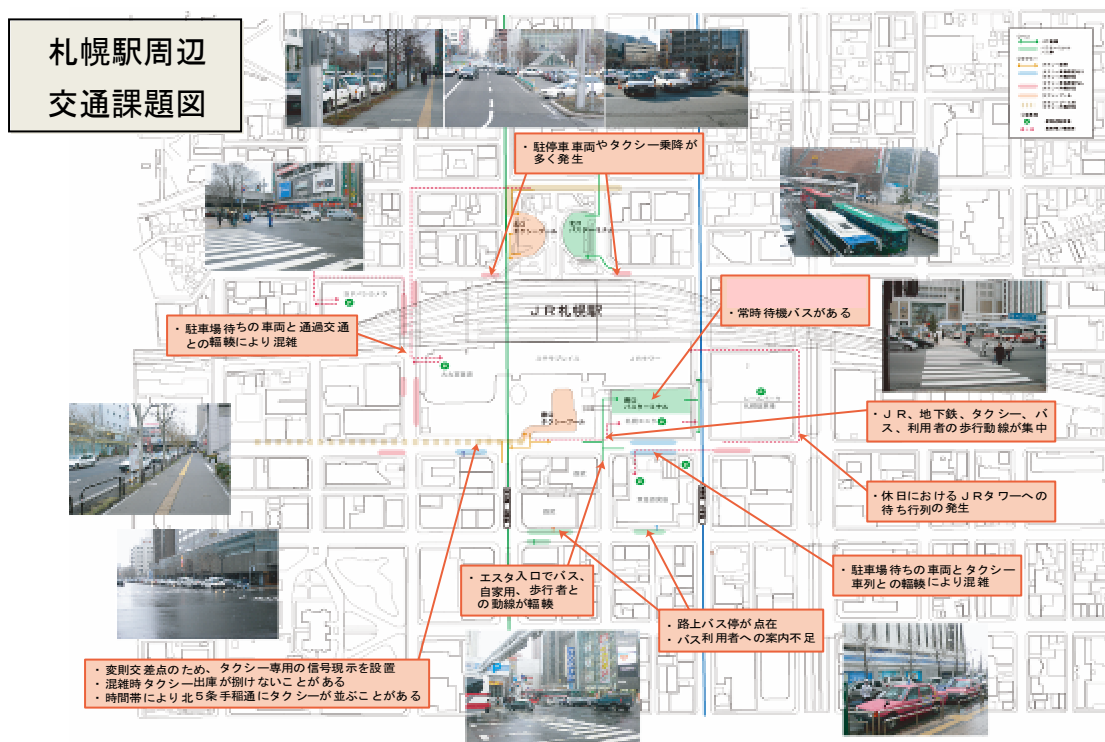
地球環境の保全に対する意識や資源の有効利用といった環境意識が世界的な規模で高まっている中、環境問題は、全社会的に取り組を進めるべき課題であり、札幌市においても、平成20年6月に「環境首都・札幌」宣言を行い、最も重要な市政課題のひとつとして位置付けている。

札幌駅交流拠点では、既に天然ガスコージェネレーションや雪冷熱を利用した地域熱供給など、先進的な取組が行われているが、「世界都市さっぽろ」の“玄関口”として、これまでの取組をベースに、北海道・札幌らしいみどり豊かな景観の創出や、公共交通の利用促進、太陽光等の再生可能エネルギーの有効活用など、更なる環境保全・低炭素都市づくりに向けた先進的な取組を推進し、「環境首都・札幌」を象徴的に表現していくことが求められる。

(4) 『交通』：北海道・札幌の玄関口としての「交通結節点」の形成

札幌駅交流拠点においては、東アジアをはじめとする国際観光客や国内外のビジネスパーソンにとっての北海道・札幌の玄関口として、**北の大地の魅力**をたゆまず**発信するとともに**、はじめて訪れた人でも円滑にアクセスでき、移動、乗継・乗換がストレスフリーな「交通結節点」を形成し、にぎわいの人波を札幌都心や道内各地へ送り出すことで、札幌・北海道全体の活性化につなげていくための役割が求められる。

また、現在、既設線からの延伸について検討が進められている路面電車および、札幌延伸の早期着工に向けた取組が行われている北海道新幹線など、新たな交通モードへの対応や、現状の交通課題の解消なども併せて考えることが必要である。



II 札幌駅交流拠点再整備コンセプト

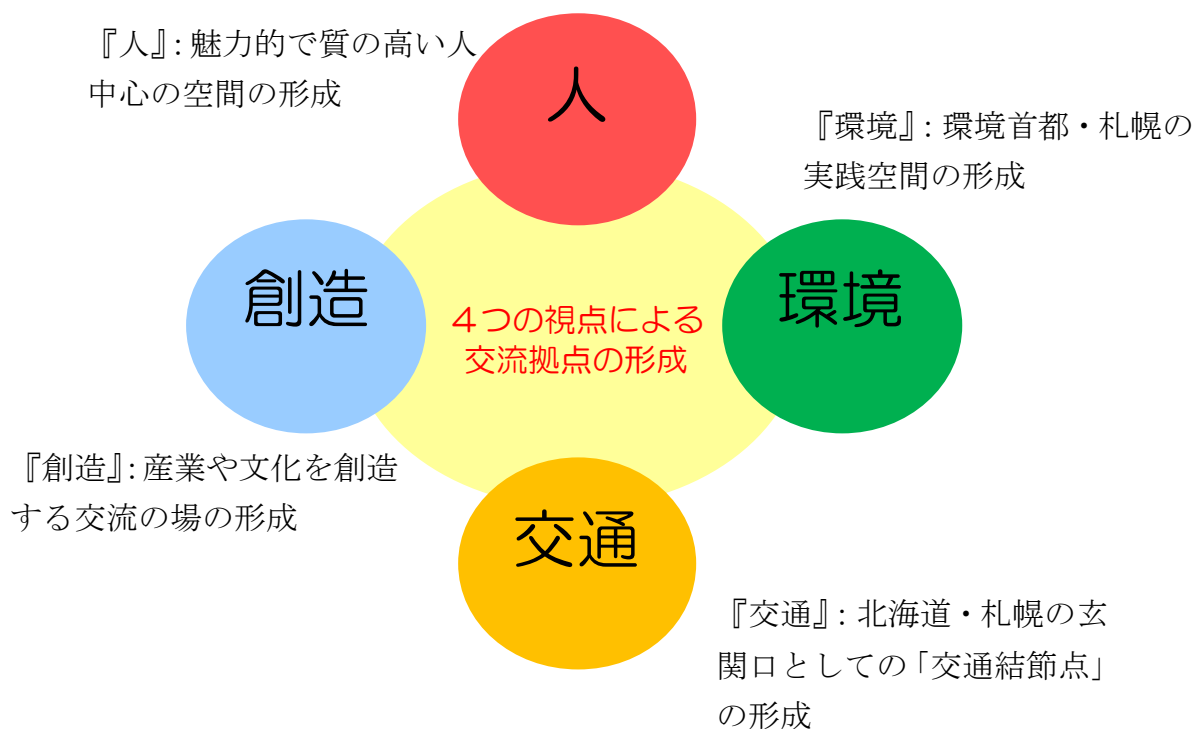
I章で整理した、“札幌交流拠点の役割・拠点形成の方向性”から、再整備に向けたコンセプトを「人間環境都市“さっぽろ”の起点 ～豊かな人間環境が創造を促し、世界と交流する～」とする。

コンセプトの実現に向けては、I-2に示す『人』『創造』『環境』『交通』の4つの視点に基づき、それぞれの視点に応じた取組を進めていくことが必要である。

0-2 都心まちづくりの目標
(背景・上位計画)

I-1 世界都市さっぽろへ向けた
基本認識

札幌駅交流拠点の位置づけ・役割：4つの視点による拠点形成



札幌駅交流拠点再整備コンセプト

人間環境都市“さっぽろ”の起点
～豊かな人間環境が創造を促し、世界と交流する～

III. 札幌駅交流拠点再整備の基本方針

III-1 再整備に向けた基本的な取組

札幌駅交流拠点の拠点形成・コンセプトの実現に向け、これまでに整理した4つの視点に応じたそれぞれの基本的な取組事項について、考え方を整理する。

(1) 『人』“魅力的で質の高い人中心の空間の形成”に向けた取組

1) 基本（現状）認識

【パブリックライフの現状】

人を中心とした魅力的な空間とは、充実したパブリックライフを享受できる空間である。札幌駅交流拠点におけるパブリックライフは、駅前広場を中心にその展開が図られているが、現状では点としての展開に留まっており、大通・すすきの方面への連続性や創成川以東地区へのネットワークが弱い状況である。

【これからのパブリックライフの展開】

今後は供用が開始された創成川通親水緑地や駅前通地下歩行空間をはじめとする、都心の4骨格軸-1展開軸-3交流拠点を中心に展開が強化されると考えられるが、その際、出会い・ふれあいといった都市の極めて大きな魅力を醸成するため、公共空間や民有地内の公開空地等における質の高い空間づくりが重要となる^{※3}。

このことから、札幌駅交流拠点では、道都札幌の玄関口としてのイメージ向上と北海道・札幌らしさを演出するため、広場や美しい街並み・景観といった来訪者を迎え入れる機能の充実を図るとともに、みどり、雪、赤レンガといった自然、歴史・文化性の表現^{※4}を念頭に置きながら、札幌駅交流拠点を起点として都心全体にパブリックライフを展開していくための空間形成を十分に意識していくことが必要である。

※3：ヤン・ゲール（Jan Gehl：デンマーク王立芸術学院建築学部アーバンデザイン科主任教授）は、その著書「屋外空間の生活とデザイン」の中で、公共空間で行われる屋外活動を、学校や仕事に行くといった必要活動と、散歩などのレクリエーション活動に代表される任意活動、およびこれらの発展形で他の人々との出会い・ふれあいといった交流を伴う社会活動の3つに大別している。このうち必要活動は屋外空間の質に左右されにくい、任意活動とその発展形である社会活動は影響を受けやすいことから、出会い・ふれあいといった都市の最も大きな魅力のひとつを醸成するためには、屋外空間の質が極めて重要であると指摘している。

※4：市民意見等調査においては、札幌の顔・シンボルとしてイメージを高めるために必要なもの、札幌らしさの演出等について、次のような意見が出されている。

- ・札幌駅周辺地区のイメージを高めるためには、広場、景観、観光案内といった来訪者を迎え入れる演出や機能を必要とする意見が多い。（市民アンケート、WEBアンケート）
- ・国際都市を目指すには赤レンガや雪といった歴史・文化性を表現することが重要である。（留学生・学生WS）
- ・札幌らしさを表現する上でも、「みどり」を増やすことが必要である。みどりは、都市空間との調和も重要な視点である。（留学生・学生WS）

【札幌都心におけるパブリックライフ】

- ・ 札幌都心におけるパブリックライフは、これまで大通公園を中心に展開されてきている。ここで大通公園におけるパブリックライフの歴史をひも解いてみると、明治4年に火防線として整備されて以来、競馬や農業博覧会の開催、逍遙地や運動場、スケート場のほか、戦時中には食糧確保のための畑としても活用された。その後、雪まつりをはじめ、夏まつり（ビアガーデン）、ホワイトイルミネーションなど、様々な展開が図られ、今日に至っている。
- ・ 都心におけるパブリックライフは、働く、学ぶ、遊ぶ、住む、といった基本的な都市の生活を支える人と人、人と都市とのコミュニケーション活動^{※5}であり、イベント交流や文化活動、ビジネス交流などを通じて育まれる人々の連帯感や都市を楽しみ、誇りに思う姿が、魅力的な都心の風景を創出する。
- ・ 都心ならではの豊かなパブリックライフは、多様性・選択性に富み、いつも何か起きていて刺激に満ちていること、また逆に、都心にいながらホッとする居心地のいい空間があること、そしてそこでは、都市に生活する人同士の、あるいは観光で訪れた人々との「コミュニケーション活動」がなされ、都心の魅力が伝播されていくこととなる。
- ・ ここで重要なのは、これらの展開が単なる商業的展開ではなく都市への愛着や誇りを醸成し、それが人々のコミュニケーションによって広く伝播していくものかどうかという点である。

【パブリックライフの展開】

- ・ 今後の公共空間等におけるパブリックライフの展開は、都心まちづくり戦略でいう重層的なエリアマネジメントを推進し、札幌流の持続可能な生活文化の創造をめざすべきである。
- ・ 2010年の夏まつり（ビアガーデン）は、夜間の営業時間の短縮やスピーカー音量の制限が行われたが、こうしたマネジメントを主催者や地域住民だけでなく、広く札幌市民やその他の民間企業も参画して継続的に展開してはじめて生活文化の創造につながるのである。なぜなら、都心におけるパブリックライフはあらゆる市民が享受すべきだからである。

※5：ここでいうコミュニケーション活動とは、都市のもつ空間や歴史・文化、人々等と出会い、触れ合うことによって、都市のよさ、素晴らしさを体感する、あるいは自らが都市活動に参画することによって、新たな都市の歴史・文化等の創造することをいう。これらの行為により、結果として人々の都市に対する愛着や誇りが醸成される。

2) 基本的な考え方

札幌駅交流拠点においては、来訪者が最初に降り立つ駅前広場をパブリックライフの起点として捉え、**起点に相応しい駅前広場の再構築と新たな顔づくり**を図るとともに、**周辺街区等では駅前広場と呼応する協調的な空間を形成**することによって、街路・広場等の都市インフラと建物とが調和した美しい街並み・優れた都市環境を構築するなど、札幌駅を降り立った瞬間から「世界都市さっぽろ」にきたことを実感できる象徴的な都市の風景^{※2}を創出する。

そして、駅前通地下歩行空間の利活用促進に加え、**都心内での移動を様々なシーン・歩行形態で楽しめる主要な「まち歩きの基軸回廊」の形成**などにより、札幌駅周辺と大通・すすきの周辺の両方の商業ゾーンの一体的な享受や、今後、重点的にまちづくりが行われる創成川以東地区等を含めた都心内の回遊性を高めていくなど、駅前広場を起点としたパブリックライフの展開を都心全体に波及させ、都心の生活に厚みを増していくための取組を進めていく。

これらの取組にあたっては、みどり、雪、赤レンガといった北海道・札幌の自然、歴史・文化性の表現や既存の財産を大切にしながら、人々が様々な交流活動に参加する、まち歩きを楽しむ、豊かな時間を過ごす、そういった活動を可能にする都市空間を創造していくことが重要である。

また、今後は公共空間等におけるパブリックライフの展開についても、都心まちづくり戦略という重層的なエリアマネジメントを推進し、札幌流の持続可能な生活文化の創造をめざすべきである。

本構想では、こうした市民・企業・行政の共創によるパブリックライフの展開を札幌流と定義し、“『人』魅力的で質の高い人中心の空間の形成”に向けた取組として、次のような方針を設定する。

- ① 札幌駅南口街区の魅力向上・機能強化
- ② 協調的呼応空間の形成
- ③ まち歩きの基軸回廊の形成
- ④ 魅力的なパブリックライフの展開

※2：都市の風景とは、都市を形成する建物や街路・広場および植栽といった都市景観要素に加え、そこでの都市生活・都市活動を含めた総体をいう。(再掲)

3) 具体的な取組イメージ

① 札幌駅南口街区の魅力向上・機能強化

札幌駅南口街区（北5西1～北5西4街区）について、パブリックライフの起点として相応しい、景観形成、機能向上を図る。

- ・具体的には、札幌駅南口街区（北5西1～北5西4街区）を一体的な空間として捉え、南口街区全体で象徴的な空間形成を図り、都市の魅力を高める。
- ・また、現在の南口広場（北5西3・北5西4街区）については、みどり、雪など北海道・札幌の自然をより感じさせる景観形成や、人々の交流を活性化する設えなど、パブリックライフの起点としての機能強化を図る。
- ・北5西1街区及び北5西2街区については、場所の特性を踏まえた機能の導入や、南口広場から創成川以東地区までの連続性を生み出す景観を形成するなどにより、新たな顔づくりを図る。

② 協調的呼応空間の形成

札幌駅南口街区（北5西1～北5西4街区）や、札幌駅交流拠点から連なる骨格軸沿いでは、大通・すすきの方面や都心まちづくりの重点地区である“創成川以東地区”など、都心全体への人々の誘引・パブリックライフの展開を導くための、協調的呼応空間の形成を進めていく。

- ・まず、札幌駅交流拠点から骨格軸に連なる都市空間の協調的・一体的な形成を図るため、協議会などの関係者間が意見を交わし、まちづくりの考え方を共有するための場や実施に向けた体制づくりを図る。
- ・こうした議論を踏まえ、札幌駅交流拠点、とりわけ南口駅前に隣接する街区は道都札幌の玄関を降り立った瞬間の印象を決定づける重要な場所であることから、駅前広場と呼応した広場空間の形成を目指す。
- ・その際、各街区相互の連携強化と界限空間の形成を図るため、単調なグリッドパターンを楽しく裏切る屋内外のフットパスが連絡しあうことが望まれる。(例えば、アスティ45の駅と道庁をつなぐ斜めパスなど)

③ まち歩きの基軸回廊

まちの景色や歩行形態が様々に変化する「基軸となる歩行者動線」を形成する。

- ・具体的には、4骨格軸（札幌駅前通、創成川通、大通、北3条通）及び1展開軸（東4丁目線）に加えて北5条通および北8条通で、ストリート文化が感じられ、パブリックライフが楽しめるまち歩きの基軸回廊を形成する。
- ・また、現在北2条まで整備が進められている創成川通の親水緑化の北伸について、都心アクセス強化とあわせて検討する。
- ・まち歩きの基軸回廊では、将来的に次のような光景がイメージできる。

○札幌駅を降り立って駅前の交流広場を眺めつつ、2階デッキにより東方向へ向い、やがて創成川に到達し、芸術と緑にまつまれた創成川通を散策。創世交流拠点を経由して大通公園を西に散策すると駅前通にいたる。駅前通は晴れた日は地上を、雨・雪の日は地下を選択できる。

- ・北8条通においては、北8西2街区および北8西3街区で協調的に形成されているオープンスペースを、今後の沿道街区の再整備時に延伸・ネットワーク化し、潤いのある快適な歩行者空間を形成する。
- ・北5条通においては、190万都市でありながら豊かな自然が間近にある札幌の魅力を活かした景観の創出に向け、西方にそびえる山々（手稲山、三角山、円山、大倉山等）の眺望を妨げないよう街路の植栽に工夫を施すとともに、建物のセットバックなど民地側の協力により小さな森や大樹の木陰空間を形成する。
- ・創成川通は、人々がたたずみ、あるいは各種アートイベントなどを楽しむ、札幌都心の新たなパブリックライフを演出する空間であり、隣接する街路や建築物の間で人々の「見る・見られる関係」を様々な形態・仕掛けにより創造する。例えば将来の創成川以東地区の開発を展望して、札幌駅と創成川以東地区を連結する2階レベルのデッキの整備を図り、「創成川を見る、見通す広場空間を確保」し、直接創成川に降りられるような環境を形成する。また、創成川に面している北5西1街区の東側は、「四季折々の変化や創成川でたたずむ人々、また、イベント時の見る・見られる関係をつくる」ため、カフェ・レストラン、展望デッキなどを配置する。

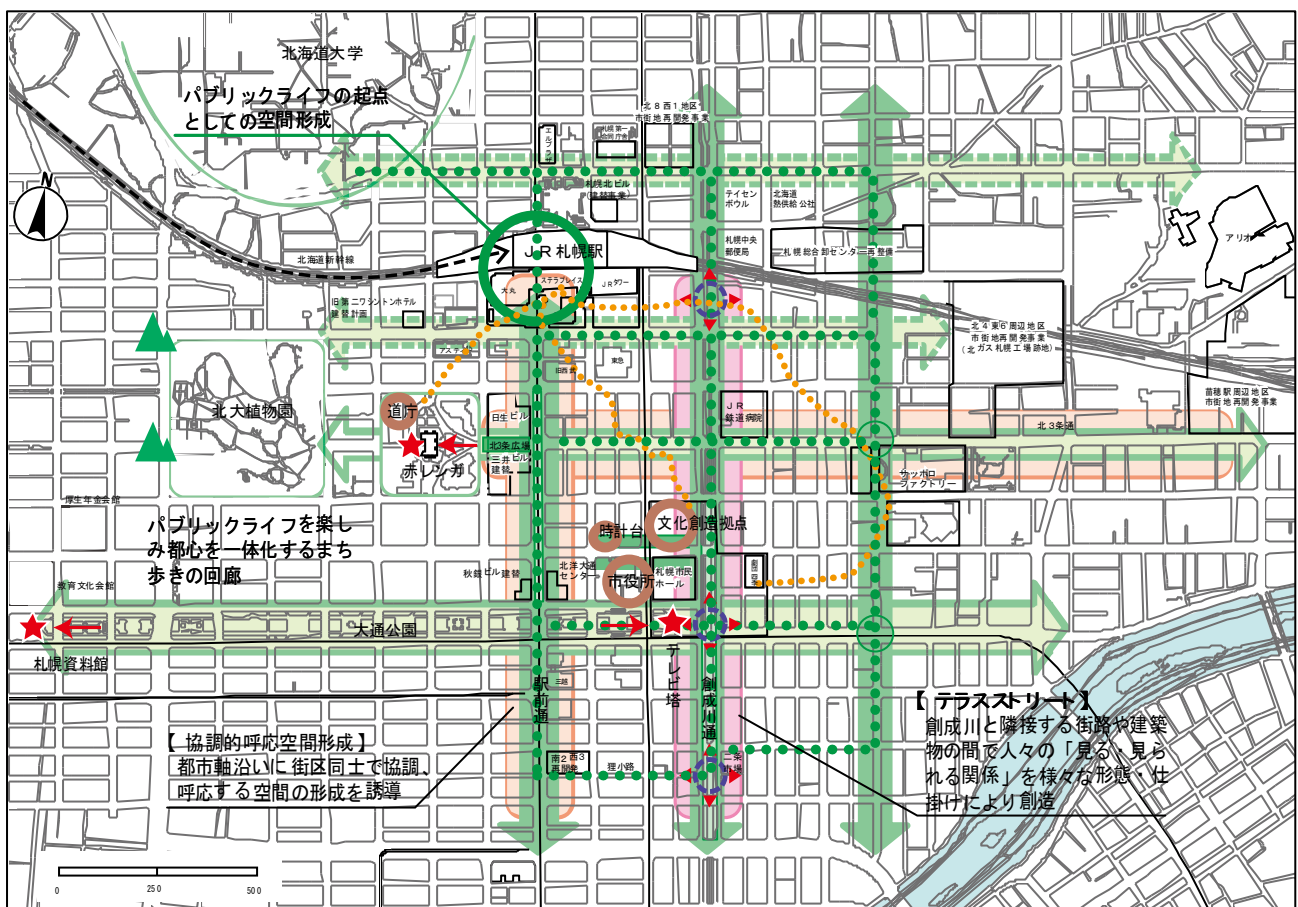
④ 魅力的なパブリックライフの展開

パブリックライフの展開としては、例えば次のような光景がイメージされる。

- 札幌都心におけるパブリックライフは、札幌駅南口駅前広場を基点として都心全体に展開され、都心のいたる所で市民が憩い、出会い、ふれあう光景があふれている。
- 新しい名所となった創成川通では、創世交流拠点を核にして、芸術家のみならず、市民参加による様々なアートイベントがいつも行われている。駅前通や大通では「だい・どん・でん」をはじめとする大道芸が繰りひろげられている。
- 札幌を代表するお祭りとなった「よさこいソーラン祭り」や、長い歴史をもつ「北海道神宮御神輿」も毎年祭典区を変えながらも、必ず札幌の顔である「まち歩きの基軸回廊」を渡り歩く。
- 四季の変化を楽しむ工夫として、例えば北海道の短い夏を満喫するビアガーデンは大通のみならず、創成川の水辺とともに、あるいは駅周辺の屋上でも西方の山々を眺望しつつ楽しむ。また、長い冬を満喫するため、夏のビアガーデン会場は歩くスキーコースやスケートリンクとしても活用されている。

- ・具体的な取組として、まず札幌都心においては、札幌駅南口駅前広場を起点としながら、4骨格軸—1展開軸—3交流拠点を中心に、日常的な憩いの空間としての活用のほか、各種イベントやフェスティバル等により、魅力的なパブリックライフの展開を図る。
- ・このような都心の魅力を醸成するためには、パブリックライフにかかわるルールづくりが必要であり、そのため重層的なエリアマネジメントが求められることから、行政、民間、市民など関係者間で意見を交わし、議論する場を形成する。
- ・さらに、こうした取組を通して、まちづくりの考え方を共有し、パブリックライフの展開による持続可能な生活文化の創造を図るため、まちづくりにかかわるルールづくりを官民で共創していくとともに、魅力ある都市空間の形成とその利活用を実践する。

図 パブリックライフの展開に向けた考え方



(2) 『創造』“産業や文化を創造する交流の場の形成”に向けた取組

1) 基本（現状）認識

【創造都市さっぽろ（sapporo ideas city）】

近年、人口減少、超高齢社会の到来のほか、経済活動のグローバル化や、環境問題の深刻化など、都市を取り巻く環境は大きく変化している。こうした中、芸術文化など市民の自由で創造的な活動により、まちづくりや産業を活性化することで新たな魅力を放ち、自立的かつ持続的に成長している都市が存在している。このような文化と産業が創造性に富む都市は「創造都市」と呼ばれており、近年の都市戦略のモデルとして注目されている。

札幌市においては、平成18年3月に、「創造性に富む市民が暮らし、外部との交流によって生み出された知恵が新しい産業や文化を育み、絶えず新しいコト、モノ、情報を発信していく街」を目指す意思を明確にするため、「創造都市さっぽろ（sapporo ideas city）」を宣言した。

【北海道・札幌の可能性】

北海道は、はっきりした四季の変化、豊富な自然や食資源など、多様な資源を有しており、さらに札幌は、充実した教育・研究機関、高度な医療機関、便利な公共交通機関などの都市機能や、文化・芸術・IT・コンテンツ産業などが集積されていることから、創造的な力によって潜在的な可能性が引き出され、新たな産業の創出などにより発展していく可能性を多く秘めている。

【創造都市さっぽろの推進に向けた取組】

「創造都市さっぽろ」の推進にあたって都心においては、これを象徴的・集約的に具現化する場を形成することとしており、創世交流拠点で文化芸術振興及び創造活動の拠点となる市民交流複合施設の実現に向けた取組が進められ、また、駅前通地下歩行空間などの公共空間では、文化・芸術活動などの創造的な活用が行われている。

【札幌駅交流拠点が果たすべき役割】

道内最大の交通結節点である札幌駅交流拠点は、「創造都市さっぽろ」を推進するうえでの重要な要素となる、市民の創造性を刺激する市内外、国内外の様々な知識や才能を持った人々が集まる場所である。

したがって、札幌駅交流拠点では、北海道・札幌の環境・歴史・文化等の情報集積や、札幌駅交流拠点周辺に立地する教育・研究機関などと連携しながら、ここに集まる人々の創造性を誘発・支援する交流の場を形成することで、「創造都市さっぽろ」を推進していくうえでの起点となることが、その大きな役割となる。

図 札幌駅交流拠点周辺の機能集積状況

